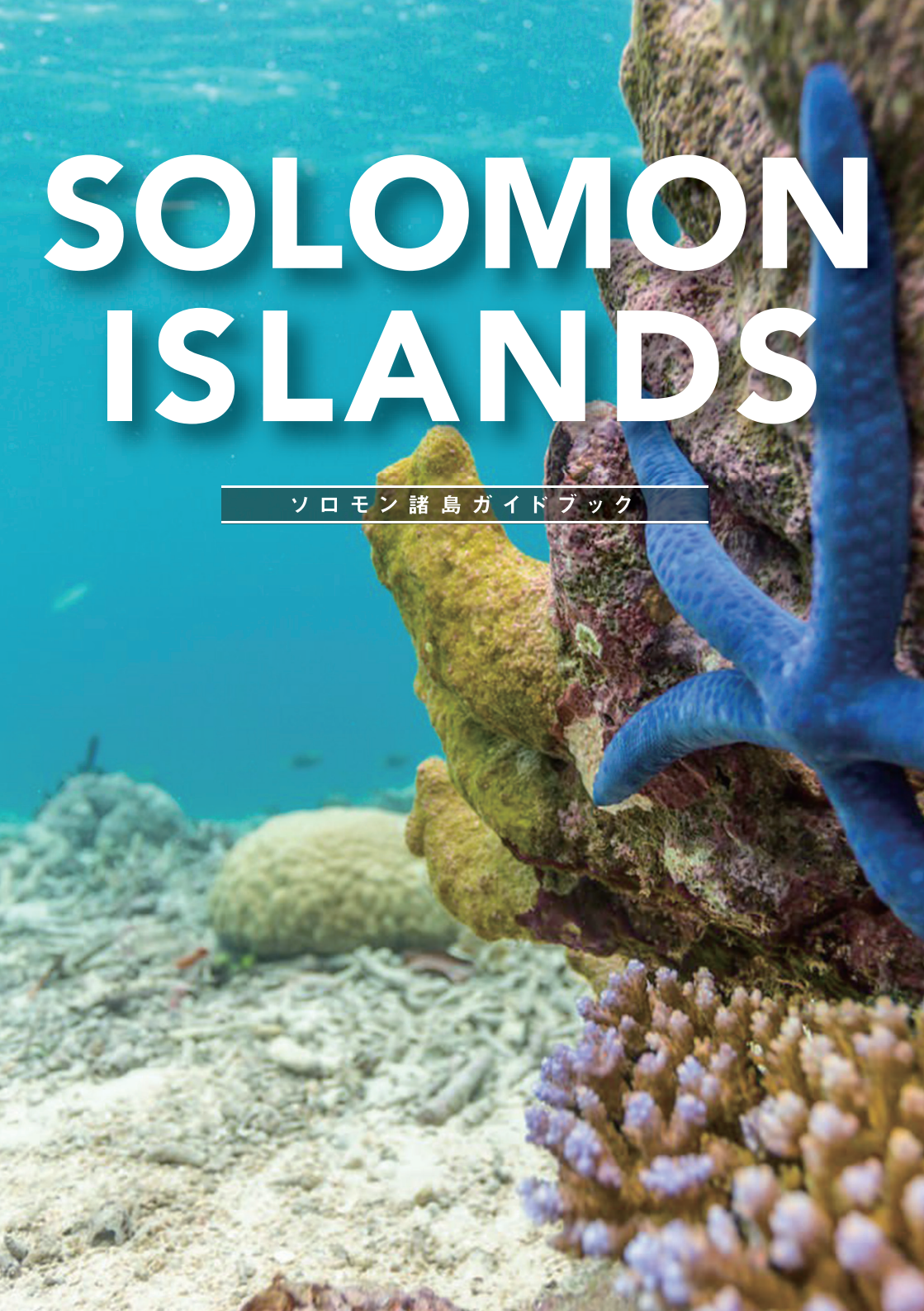


SOLOMON ISLANDS

ソロモン諸島ガイドブック

第三版改訂にあたって

本書は、国際機関　太平洋諸島センターの活動対象国である太平洋島しょ 14 ヵ国のうち、ソロモン諸島の観光情報についてまとめたものです。

ソロモン諸島は、南太平洋の昔ながらの豊かな自然に包まれた原風景が今も色濃く残されている数少ない国のひとつです。人の手が入っていない熱帯雨林やマングローブ林、果てしなく広がる珊瑚礁と魚影濃い海。また、ガダルカナル島をはじめ太平洋戦争の戦場として日本との歴史的関係は深く、戦後の交流を経てソロモン諸島の多くの人々が日本に親しみを持っており、日本人の訪問を歓迎しています。しかし日本におけるソロモン諸島の観光情報は少なく、多くの日本人にとっては、依然として「南太平洋の知られざる島々」です。そんなソロモン諸島について、みなさまが理解を深め、訪問される際の参考となれば幸いです。

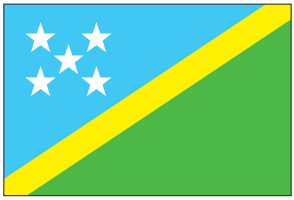
今回の第三版発行にあたっては、ソロモン諸島政府観光局日本事務所のご協力のもと、現地に住む日本人が結成したソロモン美食協会、現地JICA事務所、キタノ・メンダナ・ホテル、そして現地観光局などから、貴重な情報と写真のご提供をいただきました。この場を借りて深く感謝いたします。

2017年8月
国際機関 太平洋諸島センター

This edition is co-authored by Solomon Islands Tourism Office in Japan, with special cooperation of Solomon Islands Visitors Bureau.

＊本書にはできる限り最新かつ正確な情報を掲載するよう努めておりますが、現地事情等はしばしば変更になることがあります。現地では、各自観光局等でなるべく新しい情報を入手されることをお勧めいたします。なお、本誌を参照して生じた如何なる損失や不都合にも当センターは一切の責任を負いかねますので予めご了承ください。

ソロモン諸島



正式国名	ソロモン諸島（Solomon Islands）
面積	29,785平方キロメートル（岩手県の約2倍）
人口	653,248人（2017年 ソロモン諸島政府統計局推計）
首都	ホニアラ（Honiara）（人口84,522人　2017年同上）
民族	メラネシア系（94%）、ポリネシア系、ミクロネシア系、ヨーロッパ系、中国系
主要言語	英語（公用語）、ピジン英語（共通語）
宗教	キリスト教が人口の95%以上
政体	立憲君主制
1人あたりGNI	1,920米ドル（2015年　世界銀行）
GDP	11億2,900万米ドル（2015年　世界銀行）
通貨	ソロモンドル（SBD）
電話の国番号	（677）＋（相手先の番号）

目　次

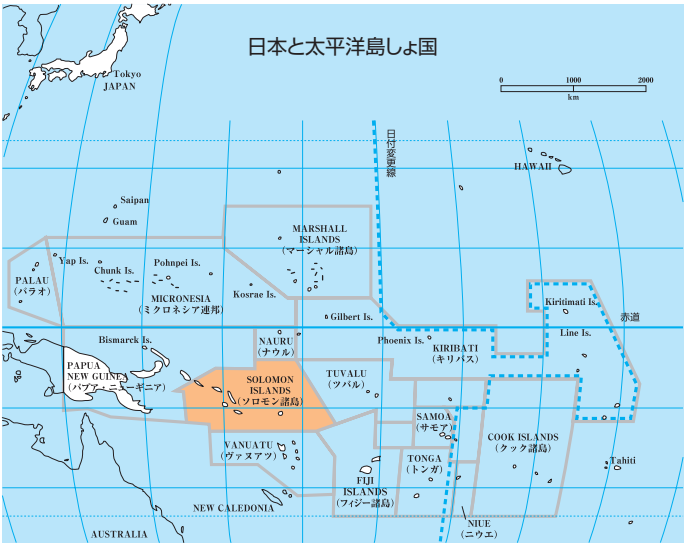
ソロモン諸島の概要 …… 2
旅行者へのアドバイス …… 9
ホニアラとその周辺 …… 14
ガダルカナルの戦いと戦跡 …… 22
ソロモン諸島の離島旅行 …… 25
関係先リスト …… 28

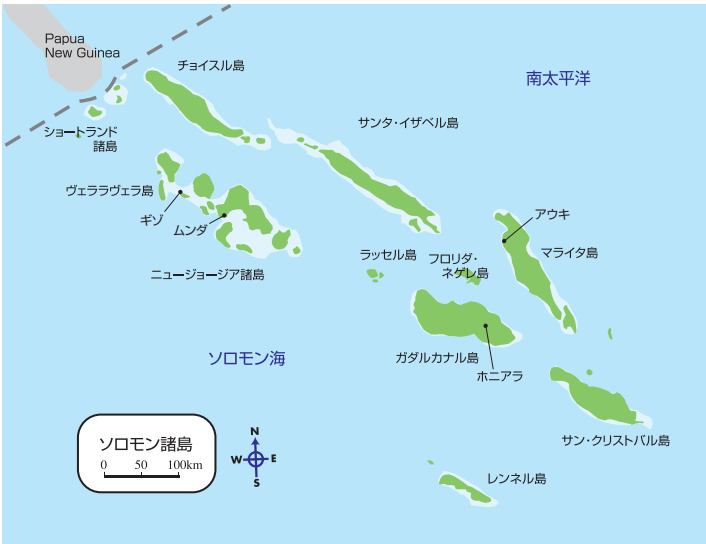
ソロモン諸島の概要

ソロモン諸島は、パプアニューギニアの東側に列をなす島々でできた国である。太平洋島しょ国では2番目に国土面積が広く、3番目に人口が多い。オーストラリアから見ると北東約1,800kmに位置する。国は大小1,000を越える島々から成り、行政上は9つの州（Province）に分かれている。首都はガダルカナル島北岸にあるホニアラで、約8万4千人が居住している。

ソロモン諸島は、19世紀後半の列強による植民地分割によってイギリス領としてひとつの行政区分としてまとめられた領域で、1978年に独立するまで単一の国家を形成したことはない。地域的にはメラネシアに属し、国民の9割以上がメラネシア系だが、島や氏族により異なるアイデンティティを持っており、各地域や氏族の伝統的な慣習や権利の維持と国としての一体感の醸成は、建国以来の大きな課題となっている。国民は計87とも言われる異なった言語を使用しているほか、共通語として英語を土台としたピジン語を話し、また多くの国民は英語も操る。

太平洋戦争の激戦地となったことにより日本との歴史的関係は深く、1980年には太平洋島しょ国ではパプアニューギニア、フィジーに続く3番目の日本大使館が開設されている。戦後日本から訪れる慰霊団や遺骨収集団による地元住民との交流は深く、また経済協力活動などを通じて日本に対して親近感を持っている住民も多い。その一方で、日本から訪れる訪問客は年間1,000人以下、うち観光客は300人以下で、日本人にとっては馴染みの薄い国のひとつである。





地　理

ソロモン諸島は、南緯5～12度、東経155～170度に連なる島々からなり、海と山と珊瑚礁が織りなす豊かな景観を持つ。パプアニューギニアのブーゲンビル島に接するショートランド島から南東約1,700kmにわたって約1,000の島々が並び、南東側国境は海を隔ててバヌアツ共和国と接している。

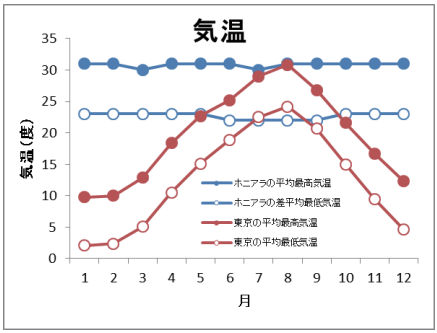
総面積は約30,000km^{2}で、太平洋島しょ国ではパプアニューギニアの次に大きい。6つの主要島をはじめ火山島が多く、主島ガダルカナル島にそびえる国内最高峰のマカラコンブル山（標高2,447m）やポポマナソー山（ガダルカナル島：標高2,330m）、ベベ山（コロンバンガラ島：標高1,770m）など、内陸部には高い山がそびえる。豊かな熱帯雨林が広がり蛇行した川が流れる島が多く、また環太平洋火山帯上に連なっているため、観光地としては未開発だが温泉もある。

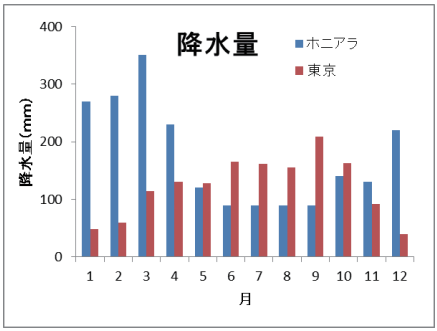
一方、隆起珊瑚礁でできた平らな島も数多くあり、海岸線は、マングローブ林、白砂と黒砂のビーチ、岩場とバラエティに富んでいる。海域も広大で排他的経済水域は南太平洋では3番目に広い約135万km^{2}に及んでおり、太平洋でも有数の漁場となっている。

気　候

ソロモン諸島は熱帯に属し、一年を通じて高温多湿な気候となっている。年間を通じた気温の変化はほとんどなく、ホニアラの平均最高気温は約31度、最低気温は約22度となっている。

雨については大きな変動があり、12月～4月までが雨期、6月～9月までが乾期となっている。最大月間降雨量は362mm（3月）、最少降雨量は92mm（8月）。雨は短時間に激しく降る熱帯特有のスコールが多い。なお、乾期でも降水日数は13日程度（8月、9月）あり、夜間に降ることが多い。





11月～1月頃には希にサイクロンが襲うことがある。その一方で、近年では突発的な集中豪雨や季節外れの洪水が度々発生している。

歴　史

●先史時代

およそ1万年前まで、ソロモン諸島はニューギニア島と陸続き、あるいは狭い海峡を隔てた関係にあり、この時代に人類は少なくともソロモン諸島のいくつかの島々に到達していた。近年の研究によると、ブーゲンビル島、ニューアイルランド島、ニューブリテン島（いずれも現在のパプアニューギニアの一部）とソロモン諸島西部一帯では「東パプア諸語」と言われる近似性の高い言語が使用されており、ソロモン諸島にはこうした言葉を操る人々が、少なくとも3万年ほど前には到達していたと考えられている。

その後、紀元前4000年頃、オーストロネシア語族（現在海洋アジア／太平洋全域からマダガスカル、台湾先住民に広がる言語系統）が西からカヌーに乗って到達、さらに紀元前1200～800年頃には、土器を持ち現在のポリネシア人の祖先とされる「ラピタ人」と呼ばれている人々が西から東に向かって移動する中でその一部がソロモン諸島にも定住した。現在のソロモン諸島に住む大半のメラネシア人は、これら民族グループが複雑に混血して形成された民族と推定されている。

ラピタ人の一部はさらに東に進みサモア、タヒチに至りポリネシア人になるが、その一部は再び西に向かって航海と移住を行っており、10～13世紀頃にソロモン諸島のいくつかの島に定住した。

●ヨーロッパ人との接触

ソロモン諸島が西洋の歴史に登場するのは1568年2月で、スペイン人の探検家ドン・アルヴァロ・メンダナが大きな島を発見、サンタ・イザベル島と命名したことに始まる。メンダナ率いる探検隊は、この島に本拠を置いてガダルカナルなど周辺の島々を6ヶ月にわたって探索、この島々を古代ユダヤのソロモン王の名にちなんで「ソロモン諸島」と命名した。メンダナは

1595年に二度目の探検を行い、ソロモン諸島の東端となるサンタ・クルーズ島（現在のテモツ州）を発見したが、マラリアで死亡した。

その後200年ほどの間は、西洋人の来航は散発的だったが、18世紀後半からはイギリス、フランス、アメリカの探検家がこの地域を訪れるようになり、19世紀前半には宣教師をはじめ捕鯨船員や貿易商が徐々に進出するようになった。

●英国植民地時代

19世紀後半、ソロモン諸島では豪州クイーンズランドやフィジーなどの植民地向け労働者の供給地として、白人たちによる「ブラックバーディング」と呼ばれる誘拐船が横行しいていた。これを禁止することを理由としてイギリスは、1893年にソロモン諸島の南東側の島々を保護領にすることを宣言、1895年にツラギ（現在のセントラル州の州都）に植民地政庁を設置した。当時は列強による太平洋地域の植民地分割が進んでおり、これに対抗してドイツはイザベル島以西の島々の占有を宣言した。1897年にイギリスが南太平洋地域での領有権拡大を宣言したことが発端になり、支配地域についてドイツ、アメリカとの摩擦が激化、三国間の交渉の結果、1899年にイギリスがサモアについて主張していた権利を放棄する代わりにショートランド島（現在のウエスタン州の一部）とブーゲンビル島（現在のパプアニューギニアの一部）の間に境界線を引き、ドイツはソロモン諸島から撤退することで合意が成立した。これにより、現在のソロモン諸島の領域がひとつの行政単位区分として成立した。

イギリス統治時代は、植民地行政府関連施設を除くと小さなヤシ農園や民間石けん工場が建てられた程度で特筆すべき開発はなされず、1939年時点でソロモン諸島に住む白人の人口は、行政官や宣教師を中心に500人程度との記録が残っている。

●太平洋戦争

1941年12月に太平洋戦争が始まると、1942年4月に日本軍はショートランドに侵攻、5月には植民地政庁のあったツラギを占領し、ソロモン諸島への本格進出を果たした。日本は、米豪の連携を遮断するための前線基地としてガダルカナル島に飛行場の建設を開始したが、同年8月7日に米軍は完成目前の同飛行場とツラギを急襲して攻略、以降、1943年2月7日に日本軍が最終撤退するまでの6ヶ月間にわたり、ガダルカナル島では日本軍と連合軍との間で激しい攻防戦が繰り広げられた。この戦闘はミッドウェイ海戦とともに太平洋戦争のターニングポイントとされ、日本軍は戦艦「霧島」「比叡」を始め24隻の軍艦と輸送船、800機以上の航空機と優秀なパイロットを失い、合わせて2万人の将兵が戦死した（22ページ「ガダルカナルの戦いと戦跡」を参照）。連合軍は以降、日本軍基地を次々と攻略してラバウル方面に西進していったが、1945年の終戦時には、ソロモン諸島ではチョイスル島と

ショートランド諸島に日本兵が残っていた。

●独立へ

第二時世界大戦終了後は、戦後処理のために1950年までアメリカ軍が駐留したが施政権はイギリスへと戻された。これに対して住民の一部はイギリスよりもアメリカの統治を望み、イギリスの弾圧的施政に反発してマアシナ・ルールと言われる反植民地行動を展開。これが住民たちの民族意識と自治意識の萌芽とされている。

その後、世界的な民族自決と脱植民地化の動きはソロモン諸島にも及んだ。イギリスは太平洋に点在していた植民地を順次独立させる政策をとっており、独立までの手順は平和裏に進んだ。ソロモン諸島は1970年代初頭に選挙による評議会を設置、1976年に自治政府を発足させ、翌1977年に独自通貨を発行、1978年7月7日に英国女王を君主とする立憲君諸国として独立が達成された。日本による国家承認は、独立と同時の1978年7月7日、ソロモン諸島の国連加盟は同年8月のことであった。

●エスニック・テンション（民族紛争）と国民和解

イギリス統治時代に基礎インフラの整備がほとんど行われていなかったソロモン諸島では、独立後も緩やかな経済発展が進む一方、現金仕事を求めるマライタ島民による、首都ホニアラのあるガダルカナル島への移住が急速に進行した。マライタ人移住者の増加に危機感を募らせたガダルカナル島民は、1998年からマライタ人の排斥運動を開始、これに対抗するマライタ人グループが武装反攻を行って民族対立が先鋭化する中、政府は効果的な対策をとることができなかった。2000年6月のウルファアル首相監禁事件以降は、国内治安機能も事実上失われ、国内はギャング団が横行する混乱状態に陥った。2003年7月、ソロモン諸島政府の要請を受ける形で、太平洋諸国は豪州を中心に「地域支援ミッション（RAMSI）」を結成、軍、警察、行政専門家を大規模に派遣して、治安回復と国家機能再生プログラムを開始した。武装集団はRAMSIの展開によって投降、また活動を停止し、その後の政府･RAMSI一体となった武装解除、和解プログラムも機能して、ソロモン諸島の治安と統治機能は劇的に回復、再び平穏な国柄へと戻った。こうした状況を受け2013年にRAMSI軍事部門は撤収、2017年６月末をもってRAMSIは解散した。

政　治

立憲君主国であり名目上の国家元首はイギリス女王だが、議会が選出するソロモン人の総督が実質的な国家元首の役割を担っている。一院制の議会は普通選挙によって選ばれる50名の議員（任期４年）から成り、国会が首相を選出して首相が閣僚を任命する議院内閣制を採用している。政党の力は弱く、議員間の合従連衡で政権が形成

されることが多い。

地方は9つの州と首都特別区（ホニアラ市）が設置され、知事（Premier：ホニアラ市は市長（Mayer））が地方自治を行っている。

経済と開発

植民地時代を含め経済開発は低調なまま今日に至っているが、太平洋島しょ国の中では国土は広く、鉱物資源や水産資源にも恵まれている。また、人口も多く若年層の割合も大きいので、市場としても潜在的魅力がある。

ソロモン諸島の1人あたりGNIは1,920米ドル（2015年世銀）。IMFの購買力平価による国別1人あたりGDPでは対象187ヵ国中166位（2014年）となっていて、国連が定めるLDC（後発開発途上国）に名を連ねている。

ソロモン諸島の産業としては、農林水産業が中心でGDPの3～4割程度を占めている。ただし国民の大半が村落部に暮らしており、彼らは自給自足をベースに、イモ類、野菜、魚介類等の換金作物を販売して、教育費や日用雑貨購入等に必要な現金を稼いでいる。

輸出品としては、木材、パーム油、カツオ・マグロ類、コプラなどだが大幅な貿易赤字が続いている。

鉱物資源は、金、ニッケル、ボーキサイトなど豊富な鉱物資源が確認されているが、土地問題などにより開発はあまり進んでいない。

政府は、鉱山開発、観光、小規模ビジネス開発などを重点分野に掲げるとともに、道路網や通信網の整備など、遅れている基礎経済インフラの整備に積極的に取り組む姿勢を見せている。

社会と文化

ソロモン諸島では小さな集落が海沿いに点在しており、集落間はカヌーやボートで行き来するところが多い。集落、あるいは同じ言葉を話す「ワントク」の結束力は強く、相互扶助の伝統や、一族の年長者を敬う習慣は現在も強く受け継がれている。一方、国内に87の異なる言語が共存していることからもわかるとおり、島ごと、民族ごとに多種多様な伝統文化や風習があり、訪れる島や村によって様々な生活文化に触れることができる。

宗教は国民の9割以上がキリスト教徒で、聖公会系のメラネシア教会を筆頭に、カトリック、セブンズデイアドベンチスト、会衆派など、様々な宗派が共存している。

人々と国民性

人口は、政府推計で653,248人（2017年）。1967年の約15万人、1997年の約38万人と比べると人口増加率は極めて高く、その傾向は現在も変わらない。また、首都ホニアラの人口増加も急激で、こうした傾向への対応施策が急務となっている。ただし、人口密度で比べると、太平洋島しょ

国の中ではパプアニューギニア、ニウエに次いで人口密度が低い国である。

一般に、ソロモン諸島人は素朴で穏やかな国民性と言われている。民族は違うが同じ「島で育まれた文化を持つ」間柄として、日本人とは共感し合える感性も多く持ち合わせている。ソロモン諸島で暮らした日本人の数は決して多くないが、ソロモン諸島の人々と接したことのある日本人はソロモン諸島を好きになる傾向がとても強い。

教　育

教育は初等教育6年、中等教育7年。初等教育は無料だが、義務教育ではない。初等学校の純就学率は約90%、日本の中学生にあたる7～9年生の純就学率はこの10年で30%前後から30%台後半に上昇している。高校卒業後は、フィジーや豪・NZの大学に進学するが、国内にもソロモン諸島国立大学（SINU）と南太平洋大学の分校が設置されている。

また各地に地域職業訓練校（RTC）が設置されており、高等教育に進学しない若者の受け皿になっている。一方、急速な人口増加に雇用が追いついておらず、特にホニアラにおける若年層の失業問題は、政府が取り組むべき大きな課題となっている。

自　然

肥沃な熱帯雨林に覆われたソロモン諸島には約4,500種類の植物が生い茂り、うち3,200種が固有種と言われている。特にランは確認されているだけでも200種以上を数える。しかし、十分な学術調査がなされてはおらず、ランの他、ヤシ、ベゴニア、ジンジャーなどでも頻繁に新種が発見されている。

海岸線はマングローブとココヤシに覆われており、西側の島々にはワニも生息している。陸は原生林が広がっており、植物相の豊かさは訪れる人を驚かせる。その一方で、近年の林業の活発化により、籐、ローズウッド、黒檀などの過剰伐採が懸念されている。

鳥類は発見されているだけで173種類が生息しており、極彩色のインコやオウム、アカコブバト、ウグイス、フクロウなど多様な鳥たちが豊かな熱帯雨林に見られ、バードウォッチャーには知る人ぞ知るスポットとして名高い。中でも火山の地熱を利用して巣作りをする珍鳥「ツカツクリ」は有名である。

また、あまり知られていないが、蝶も確認されているだけで130種を数え、珍種の蝶を求めて訪れる旅行者もいる（購入に関する情報は17ページを参照）。

旅行者へのアドバイス

アクセス

国際空港はホニアラ空港のみ。日本からの直行便はない。

乗継便は、パプアニューギニアのポートモレスビー経由（ニューギニア航空）か、オーストラリアのブリスベン経由（カンタス航空、ソロモン航空など）が便利。また運休／再開を繰り返しながら、時折シドニー～ホニアラ便が就航している。

このほかフィジー（ナンディ空港）、バヌアツ、ナウルとの間に直行便がある。

パスポートとビザ

日本は査証免除対象国に指定されており、90日以内の観光目的であればビザを取得する必要はない。ただし、パスポートの残存有効期間が6ヶ月以上必要。経由地については、パプアニューギニアであれば事前にビザを取得しなくても空港で手続きが可能だが、オーストラリア経由の場合は万一の運休に備えて事前にETASを取得しておいた方が賢明。

税　関

紙巻きたばこ200本、アルコール2リットルまでは無税で持ち込める。周辺諸国同様、動植物や肉類、武器類などは許可が必要。なお、乗継ぎ時に経由地空港の手荷物チェックで液体類は没収されるので、酒類は日本出国手続き後に購入せず、事前に購入して預け荷物に入れるか経由地空港で購入すること。

入・出国手続き

入国時は機内で入国カードと税関申告書が配布される。

出国税は航空券購入時に徴収されており、出国時に支払う必要はない。

日本の援助によりつくられた国際空港ターミナル

時　差

日本よりも2時間早い。夏時間は設定されていない。

通貨と両替

通貨は独自の「ソロモン諸島ドル」（Solomon Islands Dollars=SBD$で表示）。為替レートはこの10年ほどの間、SBD$1＝12～16円程度で推移している。外国通貨での支払いは、主要ホテル精算時を除き一般的ではない。

両替は、空港とホニアラ市内のBSP銀

行・主要ホテルで可能だが、日本円からの直接両替はきわめて換算レートが悪いので、日本で米ドルまたは豪ドルを用意し、これら通貨からソロモンドルに両替した方がよい。また、市内の銀行は混雑していることが多いので、必要な現地通貨は、到着時に空港で両替しておいた方がよい。

なお、クレジットカードに対応しているのは主要ホテルと一部レストランのみ。

チップ

チップの習慣はない。

通　信

主要ホテルはWi-Fiに対応しているが、キング・ソロモンホテルなどのようにロビーのみ接続可というところもある。

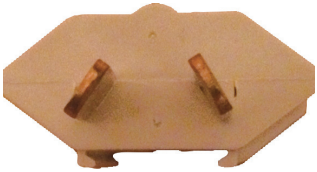
ソロモン諸島国内で携帯電話を利用したい場合は、SIMフリーの携帯電話を持参の上、SIMカードを現地で購入する（数百円程度）。電話会社は、ソロモン・テレコム社（Our Telekom）とB-Mobileの2社がある。

通信速度は、ホニアラ市内で3G（2017年2月現在）。回線の混雑状況にもよるが、ライン電話は時間により可能、動画のスムーズな視聴は困難なレベル。

国際電話は、主要ホテルであれば部屋からの通話が可能。

電　気

50Hz、240V。プラグはオーストラリアと同じOタイプ。パソコン等日本の電化製品を持ち込む場合は変換プラグを持参すること。



飲料水

ホニアラの水道水は硬水なので、旅行者は飲まない方がよい（外国人居住者は煮沸して飲用）。熱帯で日差しが強烈なので、ミネラルウォーターを購入して持ち歩いた方がよい。

現地での情報収集

キタノ・メンダナ・ホテルの隣りに観光局（SIVB：Solomon Islands Visitors Bureau　電話22442　月～金8：00～16：30　土9：00～12:00）がある。

ソロモン諸島政府観光局

また、キタノ・メンダナ・ホテルには日本人スタッフが常駐しているので、同ホテル滞在者は日本語で現地の最新情報を訊くことができる。

観光地図は、Honiara Visitors Map（英語表記）と題されたホニアラ市内観光地図が主要ホテルと観光局で入手できる。全国地図はメンダナホテルの売店と観光局で売られている。さらに詳細な地図は、政府の国土地理院（テレコムの裏手）で購入可能。

病気・トラブルとその対応

黄熱病等はなく、短期旅行者であれば事前に予防接種を義務づけられているものはない。注意が必要なのは、ハマダラ蚊が媒介するマラリアと数年に一度流行するデング熱である。

マラリアは、近年状況が改善されつつあり、短期旅行者が感染するケースは多くないが注意は必要。マラリアもデング熱も蚊が媒介するので、長袖シャツと長ズボンを身につけるなどして肌の露出を控え、露出している部分には虫除けスプレー等で対策をとった方がよい。

万一病気にかかったり事故に遭ったりした場合には、早めにホテルスタッフや日本大使館（連絡先は28ページ参照）に相談するなどし、対処法やクリニック等を紹介してもらうのがよい。

なお、2014年より外務省は、登録しておくと滞在先の最新渡航情報や緊急事態発生時の連絡メール、いざという時の緊急連絡などの受け取りが可能な、短期滞在者向け危険情報ツール「たびレジ」を運用している。

治　安

ソロモン諸島では、「エスニック・テンション」と言われる民族紛争が起き、一時治安が悪化した時期もあったが、2003年以降は改善されており、総じて治安は悪くない。人々は親日的で、日本人とわかると好意的に接してくる。また、誰にでも人懐こく話しかけてき、笑顔が絶えない。しかし飲酒時には喧嘩も多く発生するので、巻き込まれないように注意が必要。

首都ホニアラでは、日中であれば、常識の範囲内での行動をしている限り不安を感じることはない。ただ、マーケットなど市内の混雑する場所等では、ひったくりやスリなども頻発しているので十分な注意は必要。また、夜間外出時にはタクシーを利用するなどし、徒歩での移動は避けた方がよい。

ホニアラ以外の地方都市や農村でもおおむね治安はよいが、最低限の注意は払いたい。

その他の注意点

●服装

基本的にはカジュアルな服装で問題はない。政府機関を訪問する時でも白系統の襟つきシャツを着用すればよく、かしこまった式典等を除くとネクタイや上着は必要ない。

一方で、南国とはいえ露出度の高い服装

は望ましくなく、特に女性のショートパンツ姿は現地住民には一般的ではなく奇異な印象を与えるので避けた方がよい。

●持ち物

虫除け、日焼け止め、日焼け後のケアクリーム等は日本から持参した方がよい。また現地のトイレは日本と大きく事情が異なるため、外出時にはトイレットペーパーを持ち歩いた方がよい。

●私有地への立ち入り

ビーチや畑などは基本的に私有地となっている。公道を外れてこうした土地に立ち入る場合には事前に許可を求めた方がよい。ビーチや景勝地、私有地に建てられた慰霊碑の中には、地元で入場料を設定している場合もあるので、ツアー以外でこうした場所を訪れる際には別途の支払いも念頭に置いておくこと。

●写真撮影

日本ほど個人情報や肖像権にはうるさくはなく、一般にソロモン人は写真に写ることは嫌いではないが、地元の人を撮影する場合にはマナーとして事前に許可を得ること。特に村落での日常生活などを撮影する際には留意したい。

アクティビティ

●ダイビング・マリンスポーツ

ダイビングやマリンスポーツのスポットとしては、日本ではまだほとんど知られていないが魅力的なスポットが数多く点在している。ダイビングは、ホニアラ、ツラギ、ギゾ、ムンダなどにダイブショップがあるほか、ホニアラ発着でダイビングクルーズ船が運行している。ガダルカナル島の北にあるゲラ島（ラッセル諸島）や二重のバリアリーフに覆われた巨大な環礁マロボラグーンなどのスポットは人気が高く、バラクーダやギンガメアジ、カンムリブダイの群れや、イルカ、ウミガメ、マンタなど見どころは豊富で、沈船や地形派、マクロ派も楽しめる多様なスポットが点在している。

またサーファーの間では「知る人ぞ知る」ポイントが多く、イザベル州には宿泊客の大半がサーファーのリゾート施設もある。このほか、フィッシング、ドルフィンスウィムも楽しめる。

●戦跡ツアー

太平洋戦争のターニングポイントとなった攻防戦が繰り広げられたガダルカナル島を始め、ソロモン諸島各地は第二次世界大戦の激戦地であり、ソロモン諸島を訪れる日本人観光客の多くは慰霊巡拝や戦跡巡りを行っている。ホニアラ周辺にも数多くの戦跡があり、時間に応じてツアーを行うことができる。

●離島旅行

ソロモン諸島旅行の醍醐味のひとつは、定型化された「観光」から一歩踏み出してオリジナルの旅を体験すること。火山とツカツクリの巣を訪れるサボ島旅行や戦前の政庁所在地で巡洋艦「菊月」の船影を見学できるツラギへのツアーはホニアラから日帰りでも可能。また、個人旅行経験豊富な

旅行者なら、90年代に「太平洋の島でもっとも印象に残ったスノーケルポイント」と旅行作家が絶賛したケネディ島を擁する保養地ギゾ（ウェスタン州）、カメの聖地アナボン島（イザベル州）、貝貨と遠洋航海用カヌーを作っているランガランガ（マライタ州）、太平洋島しょ地域で最も早く世界遺産になったレンネル島（レンベル州）など、特別な旅が経験できるスポットが少なくない。時間に余裕があればぜひ旅程を組んでチャレンジしてみたい。

宿泊施設

首都ホニアラには、レストラン、バーやWi-Fiを完備したホテルが複数ある。地方にも主要都市やいくつかの観光スポットに宿泊施設がある。しかし、観光産業が未発展なため、リゾートと呼べる宿泊施設は決して多くはなく選択肢は限られている。ソロモン諸島の旅は、豪華なリゾートライフを満喫するというよりも、手作り、心づくしのサービスを楽しむものと考えた方がよい。

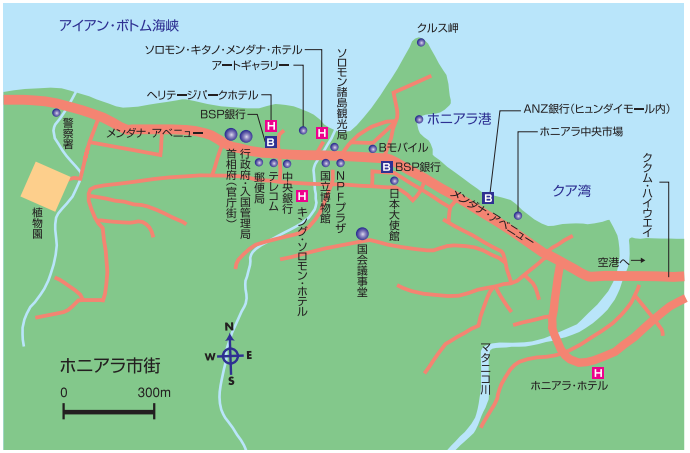
ホニアラとその周辺

首都ホニアラは、ガダルカナル島北側中央よりやや西に位置し、特別行政市としてガダルカナル州とは別に市制が敷かれている。都市としてのホニアラの歴史は浅く、太平洋戦争でホニアラ空港（旧称ヘンダーソン空港）が日本軍により建設され、これを奪取した連合軍が周辺を拠点化したことに伴いインフラが整備されたことが街としての始まりである。戦後、施政権を回復したイギリスが政庁を戦前のツラギから移転したことで市街としての体裁も整えられ、独立後も首都となった。

ホニアラはソロモン諸島で唯一の「都市」と言ってよく、政治のみならず物流や移動の中心地である。近年では人口が急増し、都市インフラの整備が急務となっている。

●空港から中心部まで

ホニアラ空港から中心部までは、海岸沿いのククム・ハイウェイを西に向かい約10キロの距離。空港を出発して2キロほどでルンガ川を渡り、さらに2キロほどでゴルフコースと産業地区ラナディに到着する。その後2キロほどでパナティナ地区、ソロモン諸島国立大学（SINU）パナティナ校を過ぎ、昨今急速に街が形成されてきたククム地区となる。さらに2キロほどで右手に中央病院、左手にチャイナタウン入口となり、マタニコ川を渡ってメンダナアベニューを進むと、市場、港、キタノ・メンダナ・ホテル、政府庁舎、日本大使館などがある市内中心部に至る。



●市内の移動

ホニアラは小さな街なので、時間に余裕があれば歩いてま

わってもよい。ただし、スコールとぬかるみも多いので、泥はねなどは覚悟した方がよい。

効率的に移動するにはタクシーが便利。タクシーはメーターがなく、1キロ10ソロモンドル（2017年現在）で運転手が計算する。レンタカーもあるが、英国式のラウンドアバウトなど日本にはない交通ルールもあるので、ローカルバス同様、現地に慣れるまでは利用を避けた方がよい。またメンダナホテル宿泊の場合は、運転手つきの車両の借り上げも可能。なお、近年は中心部の交通渋滞がひどく、特に平日朝夕のラッシュ時に中心部に向かう道路は大渋滞が日常化している。

観光スポット

（戦跡／慰霊碑関係は22ページ～を参照）

国会議事堂（National Parliament）

1993年に日本の北野建設が受注して建設。円形の外観は、到着時に飛行機の窓から街を眺めたときにも印象的。丘の上にあるので眺めも素晴らしい。

国会議事堂

ホニアラ中央市場（Central Market）

1990年代に日本の援助で建設された。農産品、海産物から衣類、手工芸品まで売られており多くの市民で賑わっている。スリやひったくりへの十分な注意は必要だが、基本的にはみなフレンドリーなので外国人も楽しめる。なお、農産品などには値札がついており、値切り交渉が前提ではない。日曜は閉まっている。

ホニアラ市場

国立博物館（National Museum）

メンダナホテルの向かいにある。館内にはカヌーや伝統的儀式に使われた道具、貝細工などが展示されている。

アートギャラリー（Art Gallery & Craft Market）

メンダナホテルの西隣にある。ギャラリー内には地元芸術家による独特の絵画や彫刻などが展示・販売されている。また外には趣のある小屋が建ち並び、婦人たちが手工芸品などを販売している。

買物とお土産

水やソフトドリンク類は、市内ところどころにある中国人経営の売店などで購入できる。スーパーマーケットは、メンダナホテル向かいのNPFプラザ内にあるWingsという店が国内最大手。

土産物は、伝統的な木彫りや貝で作ったネックレスなどが人気。特に「ヌズヌズ」と呼ばれるソロモン諸島独特の船首像は有名。これらは、アートギャラリー、ホニアラ市場、メンダナホテルなどで購入できる。

また、最近では、ナリナッツ（Ngali nut）と呼ばれるこの地域特産の実が土産品として出回り始めた。有機農法で作られているSol Agro社のナリナッツは、市内の大手スーパー（パナティナプラザ内のデリ・イン・プラザなど）や空港の土産物店などで購入可能。

Sol Agro社のナリナッツ

Trade Smart

ヌズヌズをはじめとした数々の木彫りの置物やボウル、お面などを販売。オーダー

メイドも可（電話7495375）。アートギャラリー前にある。

ヌズヌズ

Nautilus Books & Gifts

離島などから買い付けたバスケットやアクセサリー、彫り物など、店内にはソロモン諸島のありとあらゆる民芸品が所狭しと並ぶので、目的に合わせたギフト選びができる。メンダナ・アベニュー沿い、NPFプラザ内にある。

お問い合わせ　Ms. Naomi Tozaka（電話26105、Eメールdragonfly@solomon.com.sb）

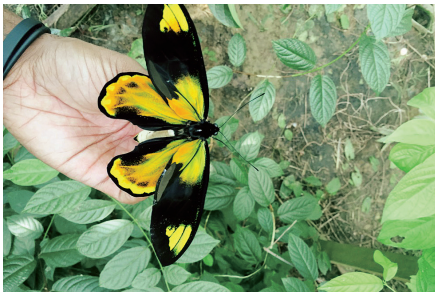
Luk luk butterfly

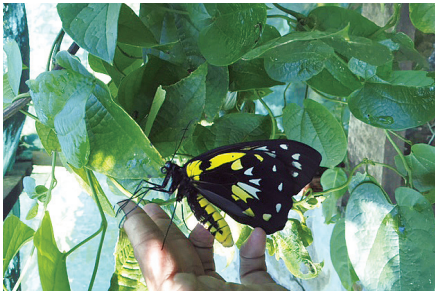
ソロモン諸島の個性豊かな蝶々を紹介している。見学、入手を希望する場合は下記まで連絡のこと。

お問い合わせ　Mr. Johnnie Ramo

Nautilus Books & Gifts

（電話7929273、Eメールjohnnieramo98@gmail.com）





蝶々

アクティビティ

ホニアラに滞在しながら日帰りで楽しめるアクティビティは少なくない。日本からのツアーに参加するのが無難だが、メンダナホテル宿泊者には日本人スタッフがアクティビティの相談にも応じてくれるので相談するのもよいだろう。

●ダイビングなどマリンスポーツ

ガダルカナル島北西の海は、「ソロモン沖海戦」「サボ沖海戦」など太平洋戦争における有名な海戦があったところで、沈没船の多さから「アイアン・ボトム・サウンド（鉄底海峡）」と呼ばれており、こうした沈船や航空機などをポイントとした日帰りのダイビングやスノーケリングが可能。また、クルージング、フィッシングもリクエストに応じて対応可能。

●ビーチピクニック

近年、ホニアラ北西側の海岸線にはビーチピクニック用の施設が整備されている。観光客用というよりは、主に住民の週末ピクニック用だが、弁当やバーベキューセット持参でこうしたビーチでのんびりするのも一興。ボネギ・ビーチでは、日本の輸送船「鬼怒川丸」の残骸を目にすることができる。

●戦跡ツアー

ホニアラを中心に、ガダルカナル北西部には数多くの戦跡が残されており、日帰りでこれらの戦跡を訪れることができる（22ページ～を参照）。

●サボ島ツアー

ガダルカナル北西のサボ島では、火山や温泉、地熱を利用して巣を作る野生のツカツクリ鑑賞、地元の村を訪れるツアーなどが可能となっており、最短だと日帰りでコースを組むことができる。また、沖合には高い確率で野生のイルカと遭遇できるポイントがあり、イルカと泳ぐボートツアーも可能。

●ツラギツアー

ホニアラからスピードボートで片道約1時間（海の状況次第）ほどで、戦前まで植民地政庁が置かれていたツラギ（セントラル州の州都）に到着する。車もほとんど走っ

ていないのんびりとしたツラギの街では、植民地時代にノミと槌だけで現地人が岩を削って作った「ソロモン版青の洞門」や、今なお岩に残るツラギ攻防戦の弾痕などを見ることができる。ツラギの沖には日本軍が水上機の基地としたガブツ島（Gavutu）とタナンボコ島（Tanambogo）があり、さらに入り江をボートで30分ほど行くと、マングローブに覆われた「トウキョウ・ベイ」と呼ばれる湾で駆逐艦「菊月」の船影を見ることができる。

●ゴルフ

中心部から車で20分ほど行ったベティカマ地区に、ソロモン諸島唯一のゴルフ場「ホニアラ・ゴルフ・クラブ」（18ホール）がある。会員制だがビジターの利用も可能。メンダナホテルなど一部ホテルではゴルフクラブセットの貸し出しも行っている。

ホテル

初めての訪問者や旅慣れていない人などは、日本人スタッフが常駐しておりホニアラを始めとするソロモン諸島各地での遺骨収集、慰霊巡拝などにも協力しているキタノ・メンダナ・ホテルに宿泊するが無難だろう。英語に不自由せず旅慣れている旅行者でメンダナホテル以外のホテルに泊まってみたい人は、下記リストを参照しつつホテル予約サイト等で比較･検討するとよい。

【ホニアラ市内の主なホテル（アルファベット順）】

ホテル名	部屋数	電話番号
Coral Sea Resort & Casino	5	26288
Heritage Park Hotel	87	24007
Honiara Hotel	88	21737
Iron Bottom Sound Monarch Hotel	36	28633
King Solomon Hotel	60	21205
Pacific Casino Hotel	173	25009
Solomon Kitano Mendana Hotel	96	20071

キタノ・メンダナ・ホテル

キング・ソロモン・ホテルのバー

レストラン

主要ホテルでは、それぞれ特徴のあるバーとレストランを併設しており、SolBrew（ソルブル）などの地ビール、数は限られているが和食、洋食、中華料理、インド料理などが楽しめる。大人数でなければ予約は特に必要ない。

また市内には「カイバー（Kai bar)」と呼ばれる店が点在しており、地元の人たちで賑わっている。

【主なレストラン（アルファベット順)】

レストラン名	ジャンル	場所	電話番号
Bamboo Café	タイ風	キングソロモンホテル内	21205
Club Havana	フレンチ	ホニアラホテル内 同ホテル内には他に中華、無国籍のレストランも	21737
HAYDNs	ステーキ、洋食	コーラルシーカジノホテル内 カジノ併設	26288
Golden Crown	中華	メンダナホテル横ガソリンスタンドとBモバイルの間	28181
Hakubai(白梅)	和食	メンダナホテル内	20071 （ホテル代表）
Lime Lounge	カフェ	コモンウェルスストリート	23064
Pacific Paradise	中華	パシフィックカジノホテル内	7588011
Renaissance	西欧・アジア料理	ヘリテージパークホテル内	24007
Taj Mahal	インド・スリランカ料理	メンダナホテル向かい	7478550
The Breakwater Cafe	カフェ	メンダナホテル隣	23442
Spice	フィジー風カレー	ककम地区ファンタスティックショッピングセンター前	8718494

パン屋

中国人経営のパン屋Happy Bakery（イートインコーナーはない）。中華まんやちまきがおいしい。ククム地区、Jカワイマニビル内にある。（電話7334649）

ガダルカナルの戦いと戦跡

ソロモン諸島は太平洋戦争の激戦地として知られている。特にガダルカナル島の攻防戦は連合軍反攻のターニングポイントとなった戦いで、日本側の戦死者は2万人を越えているが、日本兵の多くは戦闘よりもむしろ飢餓と疫病で亡くなっており、その悲惨な戦闘は、別名「餓島」として多くの日本人の記憶に残っている。こうした戦争の惨禍を受けて、戦後は多くの戦友や遺族・関係者が遺骨収集や慰霊巡拝の旅に訪れており、彼らの地元の人たちとの継続的な交流は、経済協力と並んでソロモン諸島の人々の親日的な感情に大きく影響している。ソロモン諸島を訪れた際には、こうした先人たちの記憶もぜひ辿ってみたい。

ガダルカナル攻防戦

日米開戦後、日本軍はニューブリテン島ラバウルを攻略して基地を建設後、米豪を分断すべくサモアへの進出計画を立て、ツラギを攻略して守備隊を配置するとともに、前線基地としてガダルカナル島に飛行場（現在のホニアラ空港）の建設を開始した。この飛行場建設を察知した連合軍は、1942年8月7日に大艦隊を派遣して上陸作戦を敢行（上陸地がレッドビーチ）、完成目前だった同飛行場を制圧し、ヘンダーソン飛行場と命名した。

知らせを受けた日本軍は直ちに重巡洋艦を中心とした第八艦隊を急派し、迎え撃つ連合軍と激戦を繰り広げた（第一次ソロモン海戦）。

陸軍は精強で名高い一木支隊（約900名）を急派、空港東側のタイボ岬に上陸し、8月21日未明にイル川（中川）からアリゲータークリークを挟んで突撃を行ったが、米軍の圧倒的火力の前に壊滅、海軍は敵機動部隊発見の報に第三艦隊を派遣、8月24日夜半から東部ソロモン海域で米機動部隊と衝突した結果、空母「龍驤」を失った（第二次ソロモン海戦）。

一木支隊壊滅を受けて派遣された川口支隊（約4,000名）は、米軍が制空権を握る中で9月上旬タイボ岬に上陸、飛行場南側ジャングルからムカデ高地に陣取る米軍に夜襲総攻撃をかけたが、圧倒的火力の前に失敗に終わり、オースチン山方面へと退却した。

相次ぐ奪還作戦失敗を受けた大本営は、第二師団約2万名の派遣を決定。しかし輸送船団が爆撃により大損害を出し、物資のほとんどを失う中での上陸となり総攻撃は失敗した。そして制空権・制海権を失う中で日本軍の補給は途絶え、残存将兵は飢えと疫病の中で悲惨な戦いを強いられた。

12月末、大本営はついにガダルカナルからの撤退を決定、餓死・病死を免れた敗残将兵約12,000名は、ガダルカナル島西端のエスペランス岬から2月1日から7

日にかけて撤収、ガダルカナルの戦いは終了した。

米軍の進撃

ガダルカナル島を失った日本軍は、海軍が中部ソロモン（ニュージョージア島、コロンバンガラ島など）に、陸軍が北部ソロモン（パプアニューギニアのブーゲンビル島とその南のショートランド諸島など）を受け持った。連合軍は、日本軍の拠点ラバウルに向けて1943年6月にレンドバ島に上陸すると、大激戦の末8月3日にニュージョージア島ムンダ飛行場を攻略し中部ソロモンを掌握した。コロンバンガラ島の海軍残存守備隊は9月から10月にかけてブーゲンビル島に撤退、連合軍が11月にブーゲンビル島トロキナに上陸すると、戦線はソロモン諸島を離れ北西へと移っていった。

レッドビーチ
Red Beach

1942年8月7日に米軍海兵隊が上陸した地点。その後は米軍の補給地点となった。海岸には当時の桟橋が残っており、米軍の記念碑もある。

アリゲーター・クリーク
Alligator Creek

1942年8月20日夜半に空港奪還のため最初に派遣された一木支隊約900名が川を挟んで米軍と交戦し、そのほとんどが一夜にして戦死した激戦の場所。支隊長だった一木清直大佐の遺品が発見された地点に記念碑が建てられている。

テナル教会
Tenaru Village Church

イル川（中川）の上流で一木支隊の進撃地点だった。米軍の野戦病院跡が残されている。また「一木支隊鎮魂碑」が建立されている。

ホニアラ空港
Henderson Airfield

元々は日本軍が建設した「ルンガ飛行場」で、1942年8月7日に占領したアメリカ軍がヘンダーソン飛行場と名付けた。

ムカデ高地
Bloody Ridge

空港南側にある丘で、ヘンダーソン空港奪還のための川口支隊の突入地点。川口支隊慰霊碑と第二師団慰霊碑が建立されている。

平和記念公園
Japanese Peace Memorial

激戦の地「ギフ高地」を望むアウステン山（標高400m）にある。1980年、太平洋戦争戦没者慰霊協会により平和を祈願して記念碑が建てられた。その後、2011年に有志の寄付で大改修が行われた。公園

からは記念碑を中心に市内を一望することができる。

米国記念碑

U.S.Memorial

1992年に建立されたアメリカ側の記念碑。赤御影石に日米主要戦艦の詳細戦績が刻まれており、ここからもホニアラ市内からサボ島までが一望できる。

丸山道

Maruyama Trail

第二師団（丸山政男師団長）が切り拓いた迂回路。野戦病院が設置されていた。近年は遺骨収集が進むとともに、ソロモン政府が周辺整備を計画している。

ボネギ海岸

Bonegi Beach

1942年11月の最後の大規模輸送作戦で座礁した「鬼怒川丸」の残骸が残されている。今はホニアラ市民のピクニック場。近くには米軍戦車もある。

ビル戦争博物館

Vilu Village War Museum

ホニアラ市内から車で約40分。ジャングルに放置されていた日本軍の銃砲や米軍戦闘機の残骸などが展示されている。

ソロモン諸島の離島旅行

ソロモン諸島を訪れる旅行者は、ホニアラに滞在しながら日帰りで周辺観光地を訪れることが多い。しかし、近年では各地で簡素ながらも観光客用の宿泊施設が整備されつつあり、これまで困難だったサイドトリップも可能になりつつある。ソロモン諸島の旅行先としての真の魅力のひとつは、こうしたこれまでほとんど観光客の訪れなかった離島部の自然や文化に接することにある。時間の許す旅行者はぜひチャレンジしてほしい。

一般情報

ホニアラ到着後に観光局等で宿泊施設を含む最新情報を入手した上で、ソロモン諸島航空で国内線の予約を行う。地方では、ごく一部を除き外貨両替、カード払いは不可能なので、予め十分なソロモンドルの現金を用意しておくこと。

ガダルカナル州

ガダルカナル島の舗装道路は、島の北側を、西北端のランビから東側のアオラまで通じている。しかし、一部には落橋箇所もあり増水時には通行できなくなることもある。これ以外の沿岸部の村落間は、一部歩道があるところもあるが、移動手段の基本はボートやカヌーを使った海路となる。島の中央部は2,000メートル級の緑濃い山々が連なっており、村落はほとんどないが、近年では森林伐採が始まり、林道も開かれ始めている。

●タバニププ（Tavanipupu Private Island Resort）（電話36082）

ガダルカナル島東端マラウにあるアイランドリゾート。2012年にソロモン諸島を訪問したイギリスのウィリアム王子夫妻がわざわざ訪れたことでも知られている。予約をして国内線でマラウ空港まで飛ぶとスタッフがボートで迎えに来ている。

ウェスタン州とギゾ

ソロモン諸島の中でも海の美しさで有名なのがウエスタン州。特に州都ギゾは国内でもリゾート地として名高い。ギゾはのんびりとした田舎町だが、国内第二の町であり西部諸島の中心地として賑わっている。町にはいくつかのホテルとダイビングショップがあり、沖合にはリゾートアイランドもある。ギゾでの楽しみは、なんといってもマリンスポーツ。ドロップオフやコーラルガーデン、沈船スポットなど特色あるスポットがいくつもあり、スノーケリングでも十分楽しめる。また、ニュージョージア島のムンダでもダイビングが可能。

観光客がほとんどいないマロボ・ラグーンにはエコロッジが点在しており、ソロモン諸島の人と暮らしに触れる旅を堪能することができる。

●ケネディ島

ギゾからボートで40分ほどのところにある島で、太平洋戦争中に故ケネディ米大統領が艦長だったPTボートが日本の駆逐艦と衝突し沈没した地点から泳いでたどり着いた島として有名。周辺にはスノーケリングを楽しめる美しいサンゴが広がっている。

セントラル州とツラギ、サボ

ガダルカナル島の北西に位置するセントラル州は、州都ツラギを含むフロリダ諸島（別名ゲラ）、その西に浮かぶサボ島、さらに40km西に位置するラッセル諸島で構成される。日帰りが可能なツラギ、サボ（18ページ「アクティビティ」参照）以外にも、ホニアラに住む外国人に人気のMaravagi Resortをはじめとした小さなロッジも点在している。

●Savo Sunset Lodge

（電話7498347）

サボ島西側に位置し、美しい夕陽を堪能できるロッジ。元首相のアラン・ケマケザ氏が経営している。ホニアラ市内のホテルとの送迎サービスがあり、島ではドルフィンスウィム、火山ツアー、滝散策ツアー、ビレッジツアーなども可能。サボ島をじっくり楽しみたい旅行者におすすめ。

●Raiders Hotel & Dive

（電話7494185／7938017）

ツラギにあるアットホームなホテル。ソロモンの人々とツラギの海に魅せられたニュージーランド人が経営しており、ダイビング以外にもシュノーケリングやビレッジツアーなどを丁寧にアレンジしてくれる。海に面したバーも快適。

イザベル州

人口密度が低く、圧倒的な熱帯雨林が広がる島。スアバナオ（Suavanao）空港からボートで10分のPapatura Island Retreatは豪州からのサーファーで賑わう。

スアバナオからスピードボートで西に3時間ほど行ったイザベル州最西端に、カメの聖地として世界的に名高いアナボン諸島がある。ここでは地元レンジャーが無人島に泊まり込んで自然保護に取り組んでおり、旅行者もレンジャーとともにカメの産卵を観察することができる。

●アナボン諸島（Arnavon Islands）

簡素ながら、島内に宿泊施設はある。訪問希望者は、「Arnavon Islands」で検索して訪問方法を確認するか、ホニアラにあるNGO Nature Conservation 事務所（Eメールarnavoncoordinator@gmail.com）にコンタクトする。

マライタ州

国内でもっとも人口が多いマライタ島と周辺の島々から成る。マライタ島北部ラウの人々は、手作業でラグーンに石を積んで人工島を作り、世界でも例のない、海上に住むことで知られている。また、州都アウキの南に位置するランガランガには、古来交換財や装飾品として使われてきたシェル

マネー（貝で作った貨幣）を今も作り続ける村があり、見学も可能となっている。ホニアラからは州都アウキに国内線が飛んでいるほか、フェリーも航行している。

その他の島々

ソロモン諸島の北西にあるチョイスル州（州都タロ）は1991年にウェスタン州から分離した新しい州。住民たちの多くは自給自足をベースに暮らしており、観光開発もほとんど進んでいない。

ガダルカナルの南側にあり、ポリネシア系の住民たちが暮らすレンネル島とベロナ島から成るレンベル州も、チョイスル同様、観光開発はほとんど進んでいない。同州にある東レンネルは、自然遺産として1998年に太平洋島しょ地域では最も早く世界遺産に登録されており、コウモリやウミヘビ、ラン、タコノキなど、多くの固有種が確認されている。

ガダルカナル島の南東に位置するマキラ州（州都キラキラ）は独特の伝統舞踊で名高く、年に一度行われる地元の祭りにはわざわざヨーロッパからも観光客が訪れている。

マキラ州のさらに西、ソロモン諸島の最東端に位置しバヌアツと国境を接するテモツ州は、サンタ・クルーズ諸島という名でも知られている。海外からの観光客は極めて限られているが、州都ラタや北側に位置するリーフ諸島には、近年、旅行者用の宿泊施設が作られている。

関係先リスト

大使館・領事館

●在ソロモン日本国大使館（2017年に移転しました）
Embassy of Japan
住所：4th Floor, Point Cruz Arcade Building, Hibiscus Avenue, Point Cruz, Honiara
電話：（国番号677）22953, 23641, 21073
※緊急時の専用電話（開館時間外）：（国番号677）7494469, 7494466
FAX：（国番号677）21006
E-mail：japan-embassy-solomon@sm.mofa.go.jp

●在東京ソロモン諸島名誉領事館
Honorary Consulate of Solomon Islands in Tokyo
住所：〒104-8116　東京都中央区銀座1-9-2　北野建設株式会社7階
電話：03-3562-7490
FAX：03-3562-7386
E-mail：（名誉領事館ホームページ上のフォームから送信してください）

観光コンタクト先

●ソロモン諸島政府観光局日本事務所（上記名誉領事館内に設置）
Solomon Islands Tourism Office in Japan
住所：〒104-8116　東京都中央区銀座1-9-1 KHビル5階
電話：03-3562-7490
FAX：03-3562-7386
E-mail：（http://www.visitsolomons.or.jpにあるフォームから、または名誉領事館宛に送信してください）

●Solomon Islands Visitors Bureau
住所：P.O. Box 321, Mendana Avenue, Honiara, Solomon Islands
電話：（国番号677）-22442
FAX：（国番号677）-23986
E-mail：info@sivb.com.sb
URL：http://www.visitsolomons.com.sb

貿易・投資コンタクト先

●Ministry of Commerce, Industries, Labour and Immigration
住所：P.O.Box G26, Honiara, Solomon Islands
電話：Marketing & Export Promotion Division（国番号677）22856, 25081, 25082
FAX：（国番号677）21240

写真・情報提供、記事校閲等にご協力いただいた方々（順不同、敬称略）

Special thanks to

●ソロモン諸島政府観光局日本事務所
(Solomon Islands Tourism Office in Japan)

●Solomon Islands Visitors Bureau

●JICAソロモン支所

●ソロモン美食協会

PIC の著作物に関しては、無断での複写･複製･転載はお断りしています。
さらに、転売・出品も禁止とさせていただきます。

ソロモン諸島

発行日：2005年12月26日　初版第一版
2017年８月25日　第二版

発　行：国際機関 太平洋諸島センター
〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-22-14　紫紺館1階
電話：03-5259-8419　　FAX：03-5259-8429
E-mail：info@pic.or.jp

印　刷：勝美印刷株式会社
〒113-0001
東京都文京区白山1-13-7アクア白山ビル5F
電話：03-3812-5201(代)　Fax：03-3816-1561

Printed in Japan

SOLOMON ISLANDS

国際機関
太平洋諸島センター
International Organisation Pacific Islands Centre (PIC)

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-22-14　明治大学　紫紺館1階
Tel: 03-5259-8419／Fax: 03-5259-8429
https://www.pic.or.jp　E-mail: info@pic.or.jp

表紙写真:ソロモン諸島
写真提供: South Pacific Tourism Organisation (©SPTO)